

大学不正入試事件

中川友吉

大学不正入試事件

中川友吉

(学2)

18. 2cm

大学不正入試事件

昭和50年3月8日

第1刷発行

著者

中川友吉

発行者

野間省一

発行所

株式講談社

東京都文京区音羽2-12-21

郵便番号112

電話東京(三)491-1122(大代表)

振替口座東京三九三〇

印刷所

豊国印刷株式会社

製本所

有限会社千曲堂

★落丁本・乱丁本はおとりかえします

★定価はカバー裏に表示してあります

「大学不正入試事件」は、昭和四十六年一月、大阪のある町かで起こった殺人事件が端緒となって発覚した。さまざまな人間の欲望をからませつつ、七年以上にわたって社会をあざむきとおした前代未聞の組織犯罪であった。

この記録に表われる人物の大部分は仮名としたが、事件の構成、時間的経過、関係者の意志の流れなどは、すべて事実にもとづいたものである。

目次

知られざる発端	5
サンダーバード	16
背後の影	31
奇怪な関係	38
波紋	51
入試問題	58
大学と刑務所	68
二人の密約	76
ソフトボール	87
新しい仲間	100

欲望の流れ	112
バトンタッチ	135
誘惑	146
看守の連絡	161
紫のドレス	174
密売組織	193
旅館の特訓	208
強行手段	220
虚構の門	234
終幕	246

装幀・伊藤 明
フォトイラスト・永田 文子

知られざる発端

堺市田出井町の一角をほぼ正方形に区切って、大阪刑務所の灰色のコンクリート塀が延々とつづいている。塀の高さは、きっちり五メートルあった。

刑務所の西側は、コンクリート塀に沿って一般道路があり、道路の向こう側には民家や町工場が並んでいたが、午前三時というこの時刻に起きている家はなく、むしろ、道路にも人影はなかった。一台の乗用車が、ヘッドライトを塀に投げかけて通り過ぎ、凍てついた道路に小さい風の渦ができて紙くずが舞い上がったりしたが、そのあとは、一つとして動くものがない――。

しかし、乗用車を運転していた男は、その塀沿いの道を走り抜けたとき、ちょっと気になるものを目にしていた。木製の長いハシゴがコンクリート塀に立てかけられていたのである。

刑務所に近いどこかへ帰る途中らしかったが、彼は、どうにも見過ごしてしまう気になれなかったとみえ、それから少し走ったところで車を停めて堺北警察署へ電話をかけた。

応対した警官とその男とのやりとりは、つぎのようなものであった。

「夜分お騒がせしますけれど……実は、いま、刑務所の西側の道路を車で通ったんですが、ちょっと気になるものを目にしたものですから、これはお知らせしておいたほうがいいんじゃないか

と考えまして」

「気になるもの？」

「そうです。刑務所のコンクリート塀に長いハシゴが立てかけてあるのが、ヘッドライトの中で見えたのです。いや、たいしたことじゃないかもしれませんが、時間が時間ですし、もしかして脱走事件でも起こったりしていたらと心配になりました……少し走ったところに公衆電話があったものですから、少しでも早いほうがいいと思ってお知らせしているようなわけです」

「それで、そのハシゴのあたりに人の姿などありませんでしたか？」

「だれもいませんでした。いや、いなかったと思います。なにぶんにも車で走り抜けてきただけですから」

「わかりました。早急にこちらで調べてみます。それで、あなたのお名前は？」

「そいつは勘弁してください。調べていただければそれでいいんです。なにしろ、あの道は毎日のように車で通りますが、ハシゴが立てかけてあるなどというのは、はじめてだったものですか……」

警官は、もう少し詳しく質問しようとしたが、男はそこで電話を切ってしまった。しかし、話しぶりからみて、いたずら電話のたぐいとは思えなかった。警官は、ただちに必要な処置をとるべく、まず、当直幹部に電話の内容を報告した。

堺北警察署がこの匿名の通報を受けたのは、記録によると、昭和四十五年一月十六日午前三時

十一分である。そして、その直後に大阪刑務所に対し、「刑務所西側のコンクリート塀に、外の道路からハシゴがかけられているという通報があった。監視は十分になさっているであろうが、万一のことがあってはいけないので、至急、現場を調査し、事故の有無を確認していただきたい」という旨の電話連絡がなされている。電話をかけたのは、わざわざバトカーを走らせたりするよりは、刑務所関係者に直接現場を見てもらったほうが手っとり早いと判断したからである。乗用車の男が警察へ電話をかけてから、その通報の内容が刑務所側に伝わるまで、ものの五分とかかかっていなかった。

当然、刑務所の当直室は緊張した。

塀にハシゴ——となれば、考えられる最悪の事態は、外部からの手引きによる囚人の脱走であった。当直看守のうちの数人が、あわただしい靴音をたてて西側の道路へ走った。そして、警察から教えられたとおり、まさしくそのコンクリート塀にハシゴが立てかけられているのを見た。

看守の一人は、懐中電灯の光をあわてて周囲に走らせたが、道路上はもちろん、民家の並んでいる側にも、人影らしいものはなかった。

ハシゴは、ほとんど垂直に近い角度で立てかけられているため、うつかりしておればそばを通っても見過ごしてしまいそうな状態だった。乗用車の男の目にとまったのも、たまたま視線がそこへいったという程度の、いわば偶然に近いものであった。しかし、とにかく、その先端は高さ五メートルの塀の上ぎりぎりに達しており、明らかに塀の内側との「連絡路」の役目を果たし

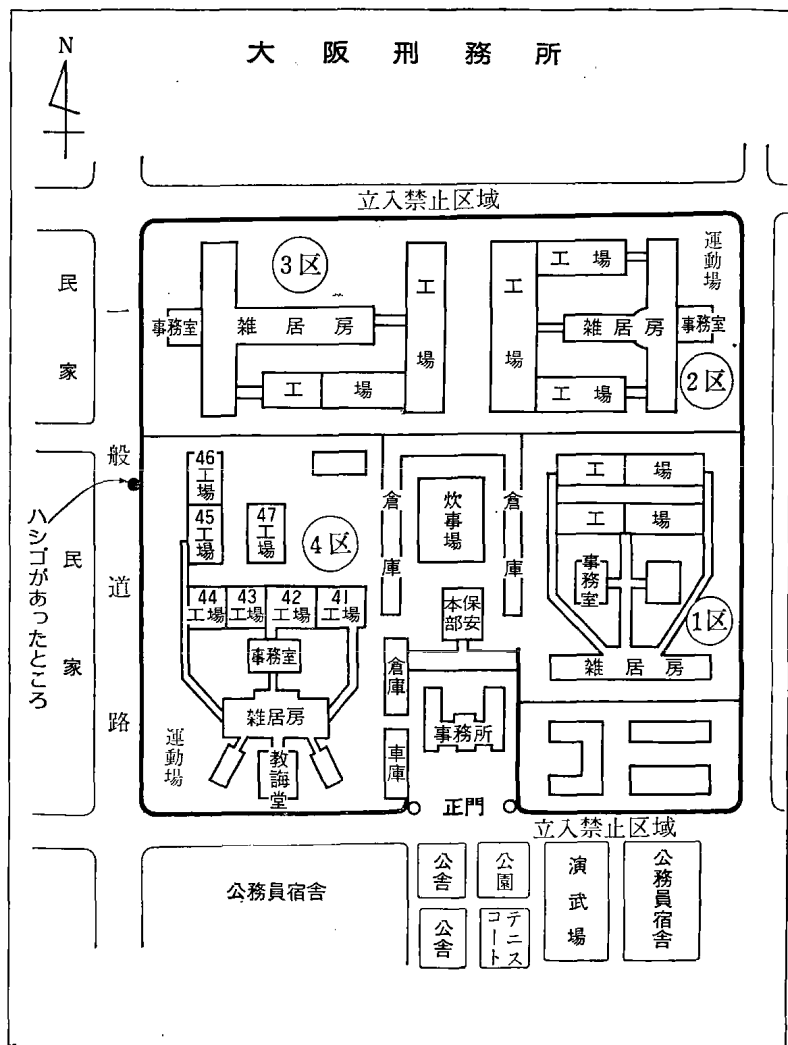
ていた。手引きする人間がハシゴに登り、塀の上からロープでもたらしてやれば、内部からの脱出は十分に可能である。看守たちは顔を見合わせ、一人が身軽にハシゴを伝って塀の上に出た。だが、塀の上からのぞいてみた限りでは内部に異状は認められず、想像したようなロープ類も目の届く範囲内にはなかった。

塀の内側には、服役中の者に作業をさせるための印刷工場があり、工場の建物と塀との間は約十五メートル幅の細長い空き地になっていた。空き地には長方形の花壇がつくられ、剪定^{せんてい}して葉のなくなったバラが植わっている。堆肥^{たいひ}にする雑草が集められ、花壇の横に小さい山ができていた。昼間だと花壇の手入れをする服役者もいたりして、この場所から塀を乗り越えるなどということはとてもできないが、夜は工場も使われておらず、それに、いちばん近い第四区の雑居房との間でさえ七、八十メートルの距離があるため、どちらかといえば、監視の目の届きにくい区画の一つになっていた。

——脱走未遂。

塀の内側に異状がないとわかったとき、看守たちが一様に考えたのがそれだった。

つまり、手引きする人間と内部の囚人の間でなんらかの方法によって打ち合わせができており、その夜、ハシゴとロープを使って脱走を執行する手はずになっていた。午前三時を期して、外部の人間は民家の陰にでも隠しておいたハシゴをかつぎ出し、コンクリート塀に立てかけた。ロープを手にしてハシゴに登ろうとしたとき、思いがけなく、自動車の近づく音がする。ハシゴを片づける余裕はないので、そのままにして身を隠した。少し間を置いて再び登るつもりをして



いたが、そのうちに何人かが走り寄ってくる足音がして、もはや、遠くへ逃げてしまふしかなかった。一方、塀の内側で待っていた囚人は、いつまでたってもロープがおりてこないのやきもきしていたが、やがて塀の外が騒がしくなったことで計画が不首尾に終わったと気づき、いち早く隠れてしまふ——という筋である。

しかし、そうだとしたら、その囚人は自分の監房まで戻ることができなかったに違いない。おそらく、そこらの物陰にひそんでいるのだろうが、刑務所に付属する公舎で寝ていた非番の職員もすでに非常連絡を受けて集まってきており、所内の一斉搜索によって見つけ出されることは時間の問題と思われた。

しかし、猶予はならなかった。

刑務所内は第一区から第四区まで四つの監区に分かれており、それぞれの区に独房、あるいは雑居房、さらに付属の工場、倉庫などがある。いま、そこで、二千人を超える服役者が眠りについていたが、想像されるような脱走未遂事件が現実にあったとすれば、いずれかの監房でなんらかの兆候が認められねばならないはずであった。

点呼は、各監房で一斉に行なわれた。

突然たたき起こされた服役者たちは、のろのろと青い衣服をまとい、不平と眠気のまざり合った顔を並べていた。が、そんなことにかまってはいられなかった。看守たちは、在監者名簿を手に、必死の面持ちで人数を調べ、そのあと、服役者たちがいままで眠っていた寢床の中を綿密に検査した。寢床を調べたのは、脱走のための道具——ありえないことだが、外部から持ち込まれ

た凶器——などが隠されているようなことがあつては、と考えたからである。

所長の江村儀一郎も、すでに身支度をととのえて所長室に姿を見せ、各監区からの報告を受けた。

「第三区雑居房、人員はそろつております。そのほか、これといった異状は認められません」
「第二区雑居房です。まったく異状がありません」

点呼と房内検査の結果は、所内電話でつぎつぎと所長室へ報告されてくる。そして、そのすべてが「異状なし」だった。

服役者は、一人も欠けないのである。江村は、宙をにらむようにして、すばやく事態を分析した。

——ハシゴを見て脱走と考えたのは、やはり神経の使い過ぎだったのか。

——それとも、脱走計画の実行中に破綻が生じたことを知り、いちはやく寢床へ戻つて素知らぬ顔で点呼を受けた者がいるのか。

——あるいは、実行直前に点呼が始まり、逃げる計画が水の泡になってしまったのか。

江村は、念のためにもう一回点呼のやり直しをさせたが、結果はやはり同じだった。疑わしいそぶりを示す者もおらず、監房の扉などにも脱走計画を裏付けるような異状は認められなかった。

では、ハシゴは、いったいなんのためにそこにあつたのか——。

江村を中心に幹部職員の協議が続いたが、断定的なことはだれにもいえなかった。

「問題は、脱走者があったかどうか、ということですが。点呼の結果、全員がそろっている。堀にハシゴが立てかけられていた以上、疑ってかかるのが原則だろうが、現実に事故は起こっていない。いや、そのハシゴにしても、付近の民家の者がなにかのついでに立てかけたまま、うっかりして片づけるのを忘れた、ということだであるでしょう。もっとも、これは調べてみればすぐわかることです……とにかく、脱走した者などなかったわけですから、今後の監視をいっそう確実にするということで、この問題に決着をつけてもいいと考えますが……」

一人がそういう意見を述べると、多くの者がうなずき合い、それが結局は妥当な判断であろうということと、この深夜のハシゴ事件は、ほぼ幕がおりたようであった。

窓の外は、そろそろ白みはじめていた。

「念のため、朝になったら、もう一度、所内のすみずみまで点検しておくように……」

江村は、そう言い残して、正門の前にある所長公舎へ引き揚げていった。結果として事故がなかったためだろう、所長室を出ていく表情は意外に穏やかだった。

職員の一人在、早速、堺北警察署へ電話をかけ、所内に異状がなかったことを告げて、先ほどの通報に対する謝礼を述べた。

人間の判断というのは、しばしば固定観念に支配されるようである。そして、ハシゴ事件に当而した刑務所関係者の場合が、まさしくそれであったといえるかもしれない。

普通に社会生活を営んでいる人にとって、刑務所は、いわば隔絶された世界である。もちろん

ん、服役者の大部分は、このコンクリート塀の内部で自分の罪を悔いつつ一日一日を過ごしているはずで、それを考えれば、なにも刑務所だからといって特別の視線を向けたりこわがったりする必要はないのだが、現実には必ずしもそのとおりにはいかず、「刑務所」と聞けば、つい、よけて通りたくなるような、そんな感じが世間一般に根ざしているとみてよかった。刑務所の存在そのものが、つねに嫌悪されているのである。

固定観念——というのが、それだった。

そして、江村所長をはじめ職員のすべてが、そういう固定観念の存在することを十分に知っていた。それを知らなかったら、この仕事は勤まらない、といってもいいだろう。だから、全員が「すすんで刑務所へ入ってくる人間はいない」と、頭から思い込んでいた。

塀に立ってかけたハシゴが発見されたとき、彼らの思考は、そこを出発点として動き出していた。「すすんで刑務所へ入りたがる人間がない」以上、コンクリート塀の内側と表の道路との「連絡路」になったハシゴの意味は、内から外へ——つまり、脱走の目的以外にないことになる。思考の出発点がそうであったため、服役者の点呼も、監房の検査も、すべてが「脱走」を前提として行なわれる結果になり、外部から侵入してくる必然性については、だれ一人、考えてみようとしなかった。

かりに、そのような必然があったとすれば、それは服役者を脱走させるための「監房破り」が入り込んでくるというケースだが、監房の検査によってその痕跡もないことがはっきりしたのだから、「連絡路」が「外から内へ」のものと考えてみる余地は、いよいよなかったに違いない。

ハシゴ↓脱走計画↓点呼↓異状なし——と、関係者の判断は、「固定観念」を梃子としてきわめてストレートな線を描いていたのである。

けれども、それは実に重大な誤算だった。

この複雑な社会の仕組みのなかで、物事は、なにがどこへ結びついていくかわからない。

刑務所のコンクリート塀に立てかけてあった一本のハシゴは、それから一年あまりたって、まったく唐突な形で一つの殺人事件に結びつき、さらに、それ以上に世の中に衝撃を与える問題へと発展するのである。

——刑務所へすすんで入ろうとする人間はいない。

それは、一般的というべき考え方だった。しかし、その世間の常識とはまったく逆に、命がけで刑務所へ侵入した一人の男がいたのである。その男ばかりでなく、多数の仲間が、ある目的のために動き出していた。ハシゴは、その動きを教える唯一の手がかりであり、たまたま彼らの不注意によって関係者の目にさらされる結果となった、たった一つの痕跡であった。

それなのに、刑務所関係者の固定観念は、この重大な手がかりをしいて意識の枠外へ押しやり、せつかくあらわれた事件の端緒を、はるか彼方へ遠ざけてしまった。

もう一つ、奇妙なことがある。

ハシゴ事件のあわただしい夜が明けると同時に、刑務所の職員たちは、所長に命じられたとおり、手分けして所内の一斉点検を行なったが、このとき、ハシゴがあったコンクリート塀と印刷工場との間、やや工場の建物に寄ったところで、茶色い毛糸手袋の片方と白い木綿のロープ一束